

論語講座を聴講してから、私はずっと考えていました。「あの儒学伝承機関である足利学校で働いたらどんなにいいだろう」と。まずは行動あるのみと、地元の教育委員会に聞きに行くと、思いがけず足利学校が職員を募集していました。それで面接試験に行くと、すぐに採用されたのです。

補助職員だったため、待遇上は一般的な会社員には及びませんでした(ある意味、ボランティアの仕事に近いものでした)。その上、仕事もなかなか大変でしたが、それでも私はとてもうれしく思いました。というのもこの仕事は自分にピッタリだと思うし、心理的にも最も安心感を与えてくれたから。仕事は金銭のためだけでなく、それを通して社会貢献などをすべきだと思っています。

多くの人に伝えたい儒学の価値

足利学校に勤め始めてから、見学者にこの日本教育の発祥地を紹介するほか、「宥座之器」を体験して



この「宥座之器」が孔佩群に中庸の道とは何かを教えてくれた

足利市と山東省済寧市(孔子のふるさと)は友好都市で、毎年ここには中国からの修学旅行や政府職員の視察がありますし、上海や北京といった大都市からのビジネス訪問団もあります。中国人のほか韓国人も訪れる。誰に対しても、私は中国国学の魅力を伝えていきます。

足利学校が収蔵する3万2000冊の古典のうち、中国の古典は1万7000冊余りあり、たとえば「四書」「五経」「老子」「列子」などは全てそろっています。いずれも「国宝」だといえるでしょう。

ここで研究と解説ガイドの仕

もらい、「論語」と中庸の道について解説してきました。これこそ私が足利学校に勤める上でのスタート地点であり、多くの人がここから中国の国学に興味を持ってほしいと願っています。

「論語」の普及と応用の面からいえば、日本人のやり方はとてもすぐれています。孔子の『論語』と儒家思想を用いて、国民の美徳と社会倫理が育まれていると思います。

学校教育では中国伝統の思想文化を重視し、たとえば団結や助け合い、ともに進歩することを強調して、「君子和而不同、小人同而不和」(君子は和して同せず。小人は同じて和せず)などを唱えています。一部の日本企業でも、『論語』の「仁・義・礼・智・信」のエッセンスを経営理念に用いて、社会責任と社会貢献を強調しています。

ただ『論語』を学ぶ日本人にも、十分でないところがあります。現在、日本では『論語』に関心を持つ人のほとんどがお年寄りで、若い人はとても少ない。これは私が残念に思うところです。

事をしていて、日本の国会議員や地方自治体の首長、大病院の院長、文化界の著名人などを案内したこともあります。足利学校は日本教育の原点なので、日本民族の性格を作りあげたスタート地点でもあります。それで各界の名士がここを参観して、自らの民族文化のルーツを知りたいと思うようです。

でも、ここに来る日本人は最初、疑問も抱くようです。「日本最古の総合大学」といわれるのに、なぜ中国の聖人、孔子の像があるのか、なぜこれほど多くの中国の古書があるのか。けれども足利学校を参観し、解説を聞いたあとは、日本文化のエッセンスのほとんどが儒学をルーツとしていることをわかってもらえます。孔子は中国の聖人であるだけでなく日本人の「至聖先師」でもある。『論語』はさらに日本の思想の源泉です。参観した多くの人が「解説がよかった」と褒めてくれますが、それも私の大きな励ましとなり、さらなる自信となるのです。